

文書館資料調査中、九州大学生体解剖事件関係資料『Fu-256』に、偶然にも発見したキーパーソン“石山福二郎文書(複写)”を書籍⁴⁾に掲載した。この文書は、バイオエシックス教育・研究への期待として、医療専門家の責務を考える上で、次世代を担う学生自身の行動規範を問うテーマと捉える。筆者は、平和な今だからこそ必要な開かれたバイオエシックスの課題であると考えている。

引用文献

- 1) 大林雅之著, 生命にふれる, 葦書房, 平成4年5月30日, 14頁
- 2) 丸山マサ美編著, バイオエシックス, 川島書店, 平成30年5月12日, 31頁-32頁
- 3) 木村利人, 生命倫理百科事典第1巻編集生命倫理百科事典翻訳刊行委員会, IV日本B. 現代日本, 国家と権力に対する医学の忠誠(1938-1968), 丸善, 平成19年1月13日, 464頁
- 4) 前掲書2, 217頁

参考文献

1. 東野利夫, 汚名「九大生体解剖事件の真相」, 文春文庫, 1985年
2. 遠藤周作, 海と毒薬, 角川文庫, 1960年

3. 上坂冬子, 生体解剖事件, PHP, 2005年
4. 九州大学第一外科百年史, 九州大学医学部第一外科同門会, 2005年10月
5. 熊野以素, 九州大学生体解剖事件70年目の真実, 岩波書店, 2015年
6. RG331, UD 1189, Box 927, Fu-256: Kyudai Vivisection, ATIS 21297 F4256
7. [http://www.dailymail.co.uk/news/article-3028694/U-S-POWs-shot-Japan-70-years-age, US POWs shot down over Japan 70 years ago were dissected while ALIVE, US bomber crew shot down over Japan were dissected while ALIVE in horrific WW2 experiments: Japanese university acknowledges full details of atrocity 70 years on](http://www.dailymail.co.uk/news/article-3028694/U-S-POWs-shot-Japan-70-years-age_US_POWs_shot_down_over_Japan_70_years_ago_were_dissected_while_ALIVE_US_bomber_crew_shot_down_over_Japan_were_dissected_while_ALIVE_in_horrific_WW2_experiments_Japanese_university_acknowledges_full_details_of_atrocity_70_years_on)
8. Weekly Information Bulletin: Proceedings of the First Military Government Conference, Headquarters USFET, 27-29 August. 1945 文書名: GHQ/SCAPRecords, Economic and Scientific Section = 連合国最高司令官総司令部経済科学局文書 Minutes (Incl. Agenda and Extracts), 会議録(含: 議案, 議事要録)
9. Personal History Statements of Japanese Army and Naval and Government Officials (Volume) 文書名: GHQ/FEC, Military History Section: The Reports of General Macarthur = 極東軍総司令部戦史部/マッカーサー元帥レポート関係文書 Minutes (Incl. Agenda and Extracts), 会議録(含: 議案, 議事要録) 他
(平成30年12月六史学会合同例会)

『解体新書』扉絵の書誌的研究

安江 明夫

杉田玄白等による『解体新書』(1774年刊)の扉絵引用元は、長年、不明とされてきた。しかし、C.R. Boxer (英国のアジア史研究者)の指摘¹⁾以来、「ワルエルダ『解剖書』表題紙絵に良く似ている」「ワルエルダ『解剖書』から模写したのではないか」と理解されるようになった。

この点をワルエルダ『解剖書』の版元、プランタン印刷所から考察してみよう。16世紀、アントワープを拠点に一大印刷業を営んだクリストフ・プランタンの印刷者マークは標語「LABORE ET CONSTANTIA (精励と不動心)」とそれを表象する「黄金のコンパス(の2本の脚)」である。当時、玄白らは欧文文字印刷禁制と理解していたの

で標語 LABORE ET CONSTANTIA は写されていないが、標語を表象する「コンパス」は扉絵に明確に描かれている。そこから、同扉絵はプランタン版ワルエルダ『解剖書』から模写したと確認できる。即ち、「良く似ている」「模写したのではないか」ではなく「模写した」のである。

ところでワルエルダ『解剖書』からの模写は扉絵だけではなく、田中邦彦教授(岐阜医療科学大学)が、比較的最近に、同書から扉絵の他に6点の解剖図を『解体新書』に模写していることを発見している²⁾。であれば『解体新書』にとってワルエルダ『解剖書』は、扉絵+解剖図6点の模写原本であり、これまで考えられた以上に重要

な西洋医学書だったことになる。

にもかかわらず『解体新書』には、ワルエルダ『解剖書』の名は、引用元書名を列挙した「凡例」含め、どこにも見当たらない。「それななぜか」が1つの問題だが、もう1つの問題—発表者の関心事—は、玄白は同書を誰から借用したのか、である。玄白は「凡例」に活用した解剖書11点を記し、それらの所持者も記している。が、ワルエルダ『解剖書』は「凡例」になく、それゆえ所持者が不明である。当時、誰がこの希少なワルエルダ『解剖書』を所持していたのか。

『解体新書』模写原本であるワルエルダ『解剖書』の所在調べは、手がかりが少ない。そんな中、『解体新書』解剖図の絵師・小田野直武（秋田藩士、秋田蘭画の祖）がヒントを提示してくれた。と言うのは、小田野と同郷で江戸時代に秋田藩医を務めた稲見家にワルエルダ『解剖書』が伝来していたからである。その点を発表者は、秋田蘭画を研究する学芸員・勝盛典子氏等の著作³⁾により知った。

稲見家伝来ワルエルダ『解剖書』（以下、稲見本）は現在、秋田市立千秋美術館が所蔵している。2017年12月にそれを実見させてもらい、また2018年7月、秋田・稲見家で同家所蔵『解体新書』等を点検させてもらった。実見の結果、1) 稲見本に些少だが墨跡（筆の跡）、2) 同書「隔膜図」には印刷ミスがあり、それに由来すると見られる小田野筆隔膜図の乱れ、3) 同じ理由による小田野筆隔膜図の正常図からの逸脱、を発見した。稲見本は『解体新書』扉絵等の模写原本である可能性が高い。

一方、稲見本は通常の輸入舶載本でなく、西洋人旧蔵のものを譲渡されたものらしい。この点は表題紙への書込みから推測されるが、その書込み（ラテン語で著者名としてヴェサリウスとワルエルダと記載⁴⁾）から、旧所持者はオランダ商館医と推測した。稲見家と長崎の接点は稲見升貞

（1709～1737）の長崎留学（1727～1731）以外にない。とすれば稲見升貞は、オランダ商館医からプランタン版ワルエルダ『解剖書』を譲渡された長崎のオランダ通詞などから、再譲渡されたと推測される。なお、プランタン版ワルエルダ『解剖書』は、江戸時代を通じ、稲見本以外に国内所在が知られていない点にも留意が必要である。

さらに言えば、杉田玄白の命を受けた大槻玄沢は、『解体新書』を改訂し、『重訂解体新書』（1826年刊）を著したが、同改訂版にはワルエルダ『解剖書』からの模写は皆無である⁵⁾。つまり、玄沢周辺にワルエルダ『解剖書』は無く、かつ『重訂解体新書』刊行は玄白没後のこと故、玄沢には同書の所在は不明だったと推測される。

以上の稲見本実見による発見と幾点かの状況的証拠により、稲見本が『解体新書』扉絵等の模写原本と発表者は推断した。発表者の推断が正しければ、稲見本は、江戸時代に日本に渡来した現存西洋医学書のうちで最も古いと見なされることもあり、日本医学史上、貴重な一書と言えるだろう。

注

- 1) Boxer, Charles R.: Jan Companie in Japan, 1600-1850. Martinus Nijhoff, 1950.
- 2) 田中邦彦：『解体新書』序図 引用元の検証（『岐阜医療科学大学紀要』No. 10, 2016.）（同論文はワルエルダ『解剖書』から『解体新書』に解剖図7点模写と記しているが、田中教授ご了承のもと、発表者は6点模写と修正している。）
- 3) 勝盛典子：江戸時代の洋風画と舶載解剖書（『杏雨』No. 16, 2013.）
- 4) プランタン版ワルエルダ『解剖書』には著者名表記がない。
- 5) 大槻玄沢は、可能ならワルエルダ『解剖書』を活用したかったに違いない。その点は、『重訂解体新書』脊髄図の奇妙さ—『解体新書』脊髄図、つまりワルエルダ『解剖書』からの模写とキュルムス『解剖書』脊髄図を接合し、それを後者から模写したと引用符号で表示—から推測できる。

（平成30年12月六史学会合同例会）